

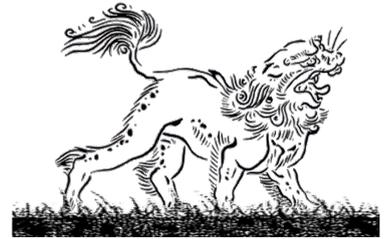


FSSI
Research Report

Kanazawa University

2021. 6

Topic



インパクトファクター（IF）、Top10%論文の調べ方と本学の傾向

本年度の THE 世界大学ランキングの日本版が、(株) ベネッセコーポレーションより発表されています。本学の国内順位は昨年同様 18 位 (278 大学中) でした。本号では、ランキングに関する研究評価指標の調べ方と所属別の傾向について報告します。

国内大学ランキング

金沢大学は 278 大学中 18 位でした。項目別では、「教育充実度」が高い一方、「教育成果」が低い傾向にありました。

国内順位：18 位 (278 大学中)

総合得点 (100 点満点)：64.0

教育リソース：60.1

教育充実度：75.3

国際性：68.7

上位 10 大学の「教育成果」の得点は、80.0 (広島大学)～98.8 (京都大学) であり、本学と比較されることの多い、岡山大学 (51.8)、千葉大学 (59.8) と比較しても本学の得点が低いことが分かります。「教育成果」は、社会的及び学術的な側面での存在感が評価されます。

Impact Factor (IF) および Top10%論文

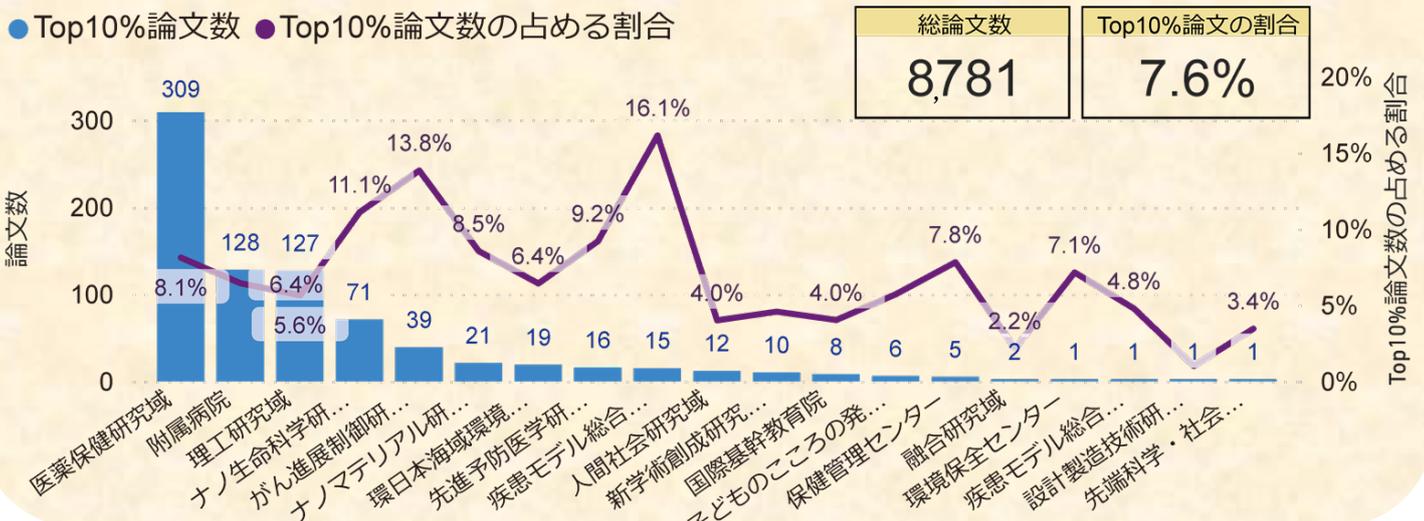
学術的な側面では本学の存在感を示すには、出版論文の影響力 (インパクト) が重要です。雑誌・論文の影響力を測る指標として、

- Impact Factor (雑誌*の 2 箇年の平均被引用回数)
- Top10%論文 (ある年の特定分野での被引用回数が上位 10%に属する論文)
- FWCI (論文の被引用回数を世界平均化により標準化した数値) 等々があります。

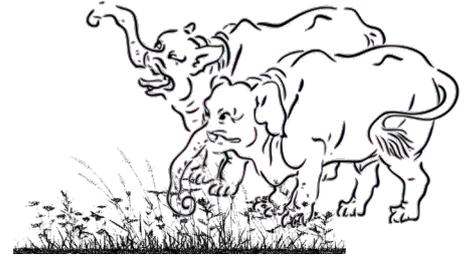
日本では、IF、Top10%論文数が、指標として広く認識されています。

* 注意：Impact Factor は雑誌の評価指標であり、その雑誌に掲載されている各々の論文を評価する指標ではありません。個々の論文を評価する場合には、その論文の被引用回数をもとにした指標である FWCI 等を用いる必要があります。

図 1. 現所属の研究者がもつ Top10%論文数および総論文数に占める割合 (2015～2020 年)



Topic



2021年4月時点で本学に所属する研究者が、2015～2020年の過去6年間に出版した論文をもとに、本学の学術的な側面での潜在能力をTop10%論文数とインパクトファクターで評価しました。

本学所属の研究者の傾向

2015～2020年の間に出版された論文の内、Top10%の論文数およびその割合を、本学に現在所属している研究者を基準として分析しました。

現所属の研究者全体では、過去6年間に約8,781報が出版されています（共著含む）。その内、7.6%がTop10%論文に該当していました。所属別（図1）では、疾患モデル総合研究センターが最も割合が高く（16.1%）、次いでがん進展制御研究所が高くなりました（13.8%）。

これらのTop10%論文数とインパクトファクターとの関係を図2に示します。近年は、Scientific ReportsやPLoS ONEといったOAJ（オープンアクセスジャーナル）が増加傾向にありますが、学術的な影響力をもつTop10%論文の多くは、同じOAJでもNature communicationといったIFが高い雑誌に掲載されて

いることがわかります。

今後、本学が学術的な側面で存在感を示すためには、NatureやScience、Cellといった雑誌以外にも、IFの高いOAJへの投稿を考えても良いかもしれません（ただし、掲載料が高いことが難点です）。

IFとTop10%論文の調べ方

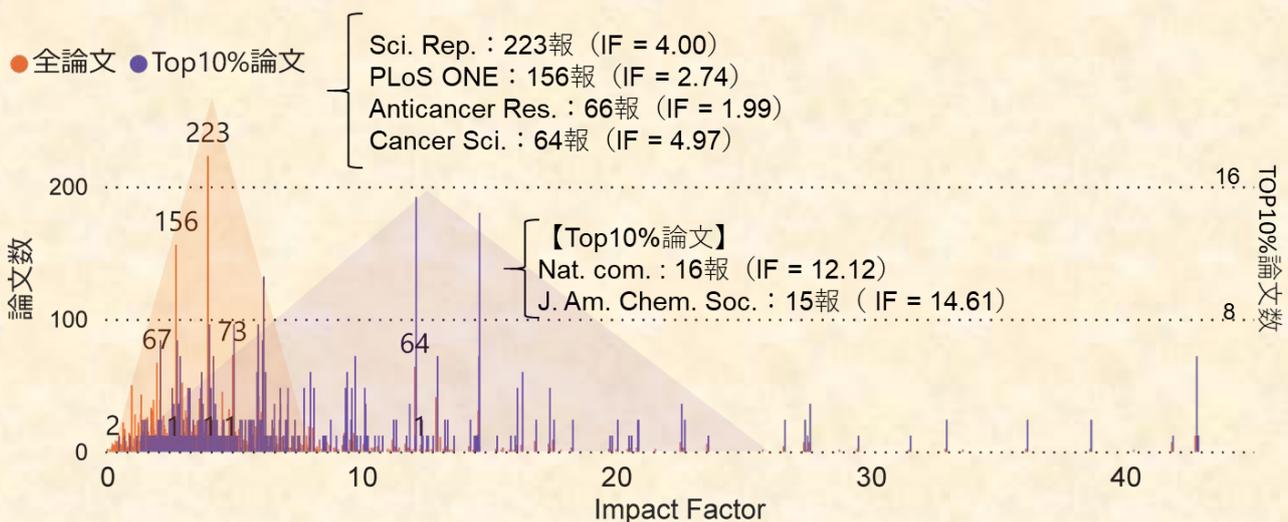
インパクトファクターは、学内LANに接続されている機器から調べることができます。[こちらのサイト](#)から雑誌名を入力すると検索できます。



スマホは
こちらから

Top10%論文は、情報ツールである「[SciVal](#)」で検索できます。本学構成員であれば誰でもアカウントが作成可能です。簡単なマニュアルを[こちら](#)に掲載していますので、是非ご覧ください。

図2. 本学のインパクトファクター別の出版論文（全論文およびTop10%論文）数の傾向



図中の三角形は出版論文数の傾向を示す。橙色は全論文、紫色はTop10%論文の出版数の傾向を示す。



研究者紹介

論文ピックアップ

本学の「Papers of the Month」に選ばれた最新の論文を紹介します。

金沢大学医薬保健研究域医学系
統合神経生理学

「体内時計のオン・オフタイマー設定
機構の一端を解明」



前島 隆司
准教授

ヒトを含む哺乳類の行動や身体機能は、脳内の視交叉上核に存在する体内時計により、約24時間周期のリズムを保つように調節されています。体内時計は時計遺伝子の働きによりリズムを生み出していますが、動物の覚醒・行動をOn/Offに切り替えるタイマー機能のメカニズムについては多く疑問が残っています。

今回、視交叉上核のある特定の神経細胞群が、神経伝達物質 GABA を介する信号伝達により核内の神経活動を増減させることで、動物が行動を起こす時間帯を形成していることを見出しました。

このような動物の行動や生理機能を適切な時間帯にOn/Offに誘導するメカニズムの解明は、生活リズムの乱れに起因する睡眠障害、自律神経失調症などの身体疾患に対する予防と治療法の開発につながるものと期待されます。

掲載雑誌名:「PNAS」

(IF = 9.412)

<https://doi.org/10.1073/pnas.2010168118>

編集者コメント

科学研究費助成事業や外部研究事業等についての情報を分析し、研究者の皆様に広く発信するために、「FSSI Research Report」を毎月発行しています。レポートに記載の分析結果詳細やアーカイブを[ホームページ](#)に掲載していますので、ぜひご覧ください。

今回ご紹介した Top10%論文数は[こちらのサイト](#)より、ご自身で操作・分析が可能です。ご興味のある方は是非、体験してみてください。(池田)

リンク一覧

研究支援全般に関する情報

<https://o-fsi.w3.kanazawa-u.ac.jp/>

レポートのアーカイブ

<https://kanazawa-fssi.com/fssi-report/>

FSSIによる研究支援

<https://o-fsi.w3.kanazawa-u.ac.jp/researcher/support/>

【お問い合わせ】



金沢大学先端科学・社会共創推進機構 (FSSI)

✉ : kanazawa-fssi-ir@kanazawa-fssi.com



6月25日 見事に開花した本部棟前のアカンサス (ハアザミ)